

学生による、持続可能な社会における生活文化創造の試み — 持続可能な社会形成のための学習支援プログラム (第1報) —

尾崎 司

Students' Attempt of Life Cultural Creation for Sustainable Society
— Study Support Program for Building a Sustainable Society (1st Report) —

Tsukasa OZAKI

はじめに

現在、地球温暖化、エネルギーや水資源、食の安全、健康など様々な地球規模の問題群に対して、個々のライフスタイルの変革と持続可能な社会づくりが求められている。近年、私たちの生活のなかでも、スローフード、スローライフ、グリーン、オーガニック、ホリスティック、LOHASといった環境志向の言葉が浸透してきており、国内のみならず世界的な潮流となっている。

グローバル化が進むにつれ、好むと好まざるとにかかわらず、これまで蓄積されてきたローカルな生活文化がゆらぎ、変容しつつあるが、それは同時に多様な価値観からの再発見・再構築によって新しい生活文化を生み出す契機ともなっている。

本稿は、以下で述べるように、東京家政大学の学生たちが広く環境をテーマに学び、地域に出向いて事業をおこなうための企画活動を報告するものである。

企画という営みが新たな価値を創造し、提案していくこととするならば、自らの生きる時代が何を求めているかを読み取り、大学に蓄積された社会資源からの学びを活かすことによって、学生たちはどのような生活文化を提案するのだろうか。

本稿では、「持続可能な社会という観点から生活文化をとらえ直し、学生がどのような生活文化を地域社会に提案していくのか」に関する学び体験と実践のプロセスを報告し、最後にその意義について考察していく。第1報ではワークショップ体験(2005年度)を、第2報ではインターンやアウトリーチの体験を中心に報告する。

1. プログラムの概要

持続可能な社会形成のための学習支援プログラム(プログラム名:「企画の教室 グリーン」)は、広く「環境」をテーマに、学生がもつ力を含めた大学の社会資源を活用し、地域社会の課

題に取り組むことをねらいとしている。

プログラムは、テーマワーク、インターン、アウトリーチという3つの柱¹⁾から構成されている。まず、学生の興味・関心のあるテーマをワークショップ（参加型学習）や外部講師による講義などで深め（テーマワーク）、その後、テーマに関連のある市民団体（NPO、NGO）などでインターン（就労による社会学習）をおこない、さらには小中学校や地域社会に出向き（アウトリーチし）授業やイベントを企画・実施する。

このプログラムの大きな特色は、こうした、ワークショップ、インターン、アウトリーチという3つの学習体験を支援し、そこから得られた知見を高等教育における地域連携のシステムづくりや学習支援プログラムにフィードバックすることにある。つまり、地域社会との連携において、実感の伴った学びという側面に焦点をあてた点が特徴的である。

実施期間は、2005年度と2006年度の2年間おこない、1年目はプログラム開発のためのパイロットプランの実施、2年目は1年目の振り返りをフィードバックし修正したプログラムを実施する。

実施場所は東京家政大学及び隣接する行政区にておこない、学部学科を問わず公募で参加者を募る。プログラムをすすめるにあたっては、筆者がファシリテーター及びコーディネーターを務める。

2. テーマワーク

(1)「企画の教室 グリーン」

学生たちのテーマを深めるワークを、全6回おこなった（表1）。学生それぞれの興味や専門とする領域が違うので、はじめにプログラムありきではなく学生と対話しながらニーズを探り、プログラムづくりをおこなった。説明会の時に動機を聞いたが、「食」と「農」に関心が高いことがわかった。各回のはじめには、NPOの取り組みなども紹介した。

表1 各回の概要

回	日程	時間	テーマ
1	6/4	16:30~18:00	グリーンのイメージ
2	6/11	16:30~18:00	コスト
3	6/18	16:30~18:00	いつまでも無理なく暮らしていける環境づくり
4	7/2	16:30~18:00	コミュニティづくりと市民（子ども）の参画
5	7/9	16:30~18:00	公開講座「エコ・コミュニティ・レストラン」
6	7/23	10:00~16:00	もし、コミュニティ・レストランを作ったら？

*参加者7名（学科内訳：栄養2名、造形表現2名、環境1名、保育2名）

第1回 グリーンのイメージ

学科を超えて交流を促進するために、「名札づくり」からはじめた。1枚の名刺サイズの紙に、呼んでもらいたいニックネームや特技・興味のあること、イラストなどを書き、身につけ

てもらった。

アクティビティ「グリーンな人を探そう」(図1)をおこない、その活動からの気づきをもとに、「みんなにとって、グリーンとは？」について考えた。意見交換のなかで、野外イベントなどでのデポジット制の食器や動物実験について議論があった。その後、アクティビティの項目にも、自然環境・人工環境・社会環境・ところが生み出す環境などいろいろな次元の環境があることを確認し、自然と人工を分けるものはなにか、環境との関係性から「障害」を捉えることなどをコメントした。

感想1

今日のワークショップに来る前は、具体案など全くなくて、話し合いがどんなものになるか分かりませんでした。先生がくれた"パーマカルチャー"や"エコ・コミュニティ・レストラン"のプリントを見て、興味があったので詳しく知りたいなと思いました。みんなと「グリーンな人を探そう」というテーマで話し合ったことで、あらたに興味がいったり、自分の興味があったこと(石けんはなぜ環境に良いのか・デポジット制食器貸し出し)を思い出すことができました。あらたに興味をわいたテーマは「紙を無駄にしない」です。伐採が進んでいる中で、私たちに何ができるか、ちょっと調べてみます。

感想2

私は「リサイクルは良いこと」と思っていたけど、かえって資源の無駄使いだという人もいて、どちらが果たして正しいのかと悩んでしまった。でも、コーンや草で作った紙の話を聞いていいなと思ったので、そういった紙をつくるのが広まっていけばいいなと思う。また、動物実験は嫌だと思っていたけど、他の人は「自分達が使うものだし、安全性を確かめるために、一概に反対とは言えない」という意見だったので、少しショックを受けた。動物実験をしなくても人にとって安全なものをつくることは可能だと思うし、実際そういった企業もあるようなので、私はやはり動物実験には反対したい。関係性を変えることで、マイナスの価値を持っていたものもマイナスでなくなるというのは目からウロコだった。

第2回 コスト

まず、昨日の昼食に食べたものをA3サイズの紙に描いてもらった。紙には食品だけでなく、食器やどこで手に入れたかなども書き込みをしていった。その後、グループになり、自分たち

の昼食が「グリーン」かそうでないかを話し合いながら、ランキングをしてもらった。ランキングをするなかで、わりばしや包装、プラスチックなどゴミがどのくらい出たかという議論がはじまり、ゴミが出たからグリーンではないのかという問いかけから、使用された電気や熱量、油の処理、食器を洗う水の量と水質処理、食品を加工する過程、健康面など様々な意見交換がおこなわれた。「グリーン」という定義が曖昧なまま議論をはじめたが、どういう基準がグリーンなのか、自分たちにとって何がグリーンなのかを問うきっかけとなった。

一通り、話が出た後で「自分の手元に届くまでのコスト、エネルギーは、どのくらいかかるのか？」と筆者が補足的に問いを投げかけた。毎日、私たちが食べている食事は、素材が手元に届く過程、調理する過程、ゴミを出す過程、さらにはその循環の過程など日常生活のなかのコストを考えることが重要である。食とエコの関係をみんなで考える機会となった。

感想 3

- ・お弁当を持ってくる人、買う人と人それぞれあって作られるまでの工程が違ったり、洗いものの点や色々な視点から話が聞きました。
- ・最後に先生が言っていた視点（その材料等が自分の手元に来るまでのコスト）を考えると奥が深いと思いました。
- ・特に加工食品は、手軽に購入できるけど、その部分のコストはすごくかかっていると忘れてしまいそうだと感じました。
- ・ベジタリアンの人の話題を聞いた時、公共広告のCMで、“学びたい、でもその前に食べたい” というような広告を思い出しました。

感想 4

たった1回の食事でも、グリーンとNotグリーンとに分けることは難しいと思った。私はコンビニで買った食事で、ただゴミの量のみを考えて、Notグリーンだと思ったけれど、洗い物を考えると洗い物は全くない。しかし、それだけではグリーンだ!! とはやっぱり言えない。考えてみると、コストが気になるからだと思った。いくら近場の工場で作られているとはいえ、トラックが走れば、CO₂が排出される。コンビニに着いてから商品を冷やしておくために電気が使われる。人にいたっては、工場で働く人、トラックで運ぶ人、コンビニで働く人、その他に、農家の人、野菜や肉など材料を運ぶ人、もう考えられないくらい、人の手から人の手に渡っていることを思うと、ちょっと引いた。環境って、輪?と考えさせられた。

第3回 いつまでも無理なく暮らしていける環境づくり

「10年後、わたしたちの身の周りの環境はどんなふうになっているか？」について、みんなでイメージを出し合った。ソーラーパネルがもっと普及している、風力発電が全家庭にある、生ゴミ処理機、エコカーの普及、ユニバーサルデザイン・バリアフリーがもっと進む、都市ではもっと緑が増えている、化石燃料が減る・なくなる、などの意見がでた。

次に、NHKスペシャル「環境革命が始まった～循環型社会への挑戦」を見た。この番組は、愛・地球博（愛知万博2005年）での取り組みに合わせて、循環型社会へ向けた3つの最前線の取り組みを紹介したものである。1つは植物からプラスチック（ポリ乳酸）をつくりだす米国企業の「プラスチック革命」、2つには廃棄物をエネルギーに変えたスウェーデンの「エネルギー革命」、3つ目は日本列島に匹敵する国土に植樹した、中国の「13億人の森林再生」につ

感想5

スウェーデンのエコ・エネルギーの浸透ぶりはすごいなあと思った。エコ・エネルギーは素晴らしいエネルギー源だけど、それが広まるようになったきっかけは、原子力発電所の事故だったと考えると、人間は危機的状況に直面して、追いつめられないと、自分達や自分達の住む場所の将来について真剣に考えて、取り組むことができないのかなあと、複雑な気分になった。

日本でもエコ・エネルギーが推進されていけばいいと思う。政府がエコ・エネルギーへの援助・促進につながる政策を打ち立てるなどして、スウェーデンのように国全体で取り組みがはじまるといいなと思う。

感想6

7/9のエコ・コミュニティ・レストラン講座で、いま現在、環境のことを考えて活動しているグリーンな人の話を聞けるのが楽しみです。今日は「10年後、私たちの周りの環境はどうなっているか」ということを考えてみて、様々な角度から意見があって楽しかったです。「自分ひとりでも始める」ことから、「多くの人が意識を持って、地球を守ろうとする」ことに発展していくのだと思いました。夢や10年後こうあってほしいなあという希望を叶えるには、今この時点から、気づいたことを始める・ライフスタイルを変えるしかないと思いました。

まだまだ私の生活は、バイト先で洗剤を多量に使っていたり、ペーパーナプキンをすぐに捨てたり、グリーン度が低いと思います。周りに環境を考える人がいない場合でも、「私はこうする」と勇気を持って行動に移すことだと思います。

いて、タイムリーで刺激のあるレポートがなされている。

その後、持続可能性 (sustainability) についてミニ講義をおこなった。また、未来のイメージは、1) 変化なし (人の本質は変わらない)、2) 破壊的未来、3) 独裁的支配による未来、4) テクノロジーによって克服できる、5) エコロジカル/グリーンといったタイプのものがあるが、自分がどんなイメージをもって現実にあたるかが重要であること、エコロジカル/グリーンにもリサイクルや環境保護のようなシャロー (浅いもの) と生き方や生活そのものを変えていくディープ (深いもの) があること、などをミニ講義した。

第4回 コミュニティづくりと市民 (子ども) の参画

「コミュニティとは何か」について、みんなでイメージを出し合った。子ども会、ご近所付き合い、共同のもの、行事、挨拶、助け合い、うわさ、山、相互、商店街などの意見が出た。

次に、NNNドキュメント'05「事務次官の休日～大阪・あいりん地区と異端の官僚～」の一部を見た。この番組は、環境事務次官が休日、あいりん地区 (大阪市西成区) に足を運び、路

感想7

DVDを観て、地域は大きな家族だという言葉が響きました。家族のように困ったときに助け合い、喜びは2倍、悲しみは半分という暖かい関係を地域にも持ち込めたら、それはそれはすてきなことだと思います。私達はコミュニティのリーダーになって、よりグリーンへの意識を地域の人々が高めることができ、地域全体を変えていけたらいいです。

家政大の中でも、打ち水運動、畑を作ったり、屋上の緑化を進めたいなど、やりたいことがたくさん出てきました。グリーンへの意識が高まってきた証拠でしょうか。

感想8

来週のエコ・コミュニティ・レストラン講座が楽しみです。「コミュニティ」という言葉について、あまりはっきりとした認識を持っていなかったのですが、地理的な地域に限定されず、感情や経験、目的を共有する人々のことを言うんだと分かりました。

そう考えると、家政大学全体も一つの大きなコミュニティで貴重な仲間なのだと思いました。自分で気づいていないだけで、コミュニティはいろいろなところにあるんだと思いました。

上生活者の支援をおこなうために、英国で成功したCAN (Community Action Network) を日本に取り入れ、ビジネス的手法で再生しようとする姿を描いたものである。環境と福祉という一見、相入れない領域の壁を取り払い行動する点は、福祉行政のあり方を考えさせられる。CANでは、モーション牧師が福祉行政の限界を感じ、まず幼い子を抱え仕事に就けない人のために託児所を作るという目の前の小さなことから始めた。そして、憩いの場としてのカフェを作り、そこを地域の人たちの教育や資格取得の場にしてしまう。さらには障害者の介護職を生み出したり、建設会社の設立まで地域住民の手でおこない社会起業家を育成するなかで、スラムという環境を変革していく。CANの成功の秘訣は「地域の需要を地域の中でまかない、働く場をひろげ、福祉にビジネス感覚を持ち込むことである」とその番組は締めくくっていた。

その後、カナダのプログラム・コーディネーター²⁾が語ったコミュニティの定義、「コミュニティとは地理的な地域に限定されず、(1) ビジョン、(2) 目的、(3) 体験・経験、の3つを共有した人々でつくるものである」という考えを紹介した。

さらに、住民参画、特に子どもの参画とロジャー・ハートが提唱する参画のはしご論について、ミニ講義をおこなった。

第6回 もしコミュニティ・レストランを作ったら？

学生たちは前回の公開講座で「コミュニティ・レストラン」を自分たちが作ってみたいという気持ちになっていたので、「もしもコミュニティ・レストランを自分たちが作ったら、どのようなものにするか」というイメージをブレインストーミングし、ポストイット (付箋紙) にアイデアを書き出して、模造紙にまとめた。

どんなイメージが共有されたか、模造紙を見てみると、食というカテゴリーには「できるだけ近くの野菜」「地域の農家との連携」「無農薬野菜」「素材を活かしたメニュー」、メニューのカテゴリーには「店内の植物は食用 (ハーブなど)」「産地を表記」「生産者の顔が見える」、内装のカテゴリーには「いやしの空間」「木を使った内装」「障害をもつ人も参加できるアトスペース」「バリアフリー (段差がない床など)」「緑を店内外に」「店作りは自分たちでやる」「畳やいろり」、食器のカテゴリーには「力のない人でも握れる食器」「割り箸はなし」「食器づくり」「品評会」、イベントというカテゴリーには「栄養相談」「店のロゴ・キャラクターを作る」「子どもの意見を聞く」「歌やコント (笑い) などのショータイム」、割引というカテゴリーには「学割」「カップルに特典」「誕生日割引」、食物のカテゴリーには「"おふくろの味" 講座」「週1回イベントで焼き菓子売り出す」「無添加駄菓子づくり」、環境のカテゴリーには「コンポスト→家政大農園」「ゴミを出さないポスター啓蒙」などがあげられた。地産地消や環境負荷の小さい運営、エコシステム、バリアフリーの発想、内装や食器などの手作り、イベントなど興味深い点が多かった。

また、これまでの学びを振り返る意味で、20分程度のフォーカス・グループ・インタビューをおこなった。グループに質問をするため、一人のコメントに対して雪だるま式に意見がふく

らみ、個別のインタビューに比べ、これまでグループで学んだことが確認しやすいと考えたからである。

いくつかの点が確認できた。1点目は、これまでのテーマワークは意識を深めるのに有効であったということである。「1回1回、環境に対する意識が高まっていった」や「今まで環境のことなんて、全然考えてなかったので、とても刺激になり、こういうこともできるんだなと考える機会が増えた」という感想が語られた。また、「温暖化なども重要な問題だけれど、身近なところからテーマをひろってもらったので興味が持てた。自分から小さいけど少しずつの積み重ねが大切だと思った」というように、身近な問題に引きつけての学びが重要であることがわかった。それ以外にも、「深夜でも環境に関するテレビ番組があれば見てみようと思ったり、視点が変わった」や「今までも興味はあったが、"今、取り組んでいる" という意識があり、話し合っているときにそれを感じる」という感想などがあり、意識の変化がうかがえる。

2点目は、普通の授業とは異なるスタイルでの学びが興味・関心を引き出したということである。それは、ワークショップであったり、実践家である外部講師の話であったり、グループで話し合うことであったりするが、普段しないことに刺激があったと語っている。

3点目に、「どうしてもやってみたい」という気持ちになったということである。イベント的でも、近場で1回だけでもやってみたいと学生たちは感じており、お店の模型を企画書と一緒につくったり、メニューづくりや試食のレベルまでやってみたいというように、アウトリーチへの意欲につながっている。また、模型づくりやメニューづくりという試みは、「学科が違うからできると思う」「環境情報学科だけで集まってもできない。それぞれの学科の特性が活かせるから、これができるんだと思う」と学科を超えた取り組みの良さを指摘してくれた。

(2) エコ・コミュニティ・レストラン (公開講座)

[タイトル] エコ・コミュニティ・レストラン—その可能性と実践例

[日時] 7月9日(土) 16:30—18:00

[会場] 東京家政大学板橋校舎

[講師] 世古 一穂 (特非) NPO研修・情報センター 代表理事

[参加者数] 10名(学科内訳: 栄養5、環境2、造形2、保育1)

公開講座では、NPO研修・情報センターが推進する「コミュニティ・レストラン® (以下コミレス)」について、特に「食」と「エコ」の切り口から、それは何であり、どのようなことを進め、実際にどのような実践があるのかについて話を聞いた。

コミレスとは、「食を核としたコミュニティ支援を目的とした持続可能な社会・コミュニティを拓く実践方法としてのNPOの事業・起業モデル」であると講師の世古さんは定義している。世古さんは「女性たちが子育てをしながら安心できる職場が必要」、「子育てをしていると、子どもには安心して安全なものが食べられる場がほしくなる」など自身の想いを実現するために

約20年前に東京・国分寺に“でめてる”という玄米食を中心としたレストランを開店した。今で言う、社会的起業である。あるとき、ニューヨークでのNPOの研修会で立ち寄ったレストランがホームレス自立支援の場であることを知り、しかも、日本にあるような福祉施設ではなく街にある普通のレストランで、おいしくて、地産地消で、適切な値段であることに魅力を感じたそうである。そのことがきっかけとなって、1998年頃からレストランをNPOにリメイクして全国に展開したいと思ったと言う。

コミレスには、「コミュニティセンターの機能」「人材養成機能」「自立生活支援機能」「生活支援センター機能」「循環型まちづくり機能」という5つの機能がある。施設や公民館などではなく、食べる場がコミュニティを生み出す場となっており、地域の人材、女性、障害者が自立して働ける場として機能している。

コミレスは以下のような、5つの実践をおこなっている。

■コミュニティ・レストラン 5つの実践

1. 地産地消をすすめます
2. 健康づくりを応援します
3. 地域の食卓・地域の居間をめざします
4. 誰でも安心して利用できます
5. 循環型社会づくりに取り組みます

「地産地消」は、生産者の顔が見える食材を活用するだけでなく、旬の食材を優先してできるだけ丸ごと使う。青森のある店では、地域の人が作らなくなった郷土料理を今の形に合わせたものを提供するなど食文化の再発見と継承につながっている。地産地消は、当然「健康づくり」につながる。安心安全な食事の提供はもちろん、コミレスは食育の場となっている。また、独りだけで食べるのではなく「共に食べる」場を提供し、食を通じた子育て支援、高齢者・障害者の自立支援など地域課題への取り組みの拠点となっている。空間は、誰でも使えるバリアフリー、ユニバーサルデザインが基本となっており、女性の大王が内装やデザインを手がける例も紹介された。コミレスはエコクッキングを実践し、循環型社会づくりをすすめている。「ガスや電気、水の使用を押さえる」、「ゴミを出さない」というのは当然のこととして、エコクッキングは、例えば食材を生み出す農業で農薬やエネルギーの使用もさかのぼって考えたり、だしをとるために前日に煮干しを水につけておくなど工夫をこらす。その背景には、食材の調達から廃棄物の処理までを考え瞬間瞬間ではなく流れをつくっていく、安心安全なものはエコ・循環型という考えとリンクするという考え方がある。コミレスは「現代社会の消費・流通のあり方への一つの実験」であると世古さんは語っている。

コミレスはイベント的なものもあるが、常設で地域の課題に取り組んでいるものをさす。地域の課題と言っても多様であり、それに応じてコミレスの形態も多様である。講座では、高齢

感想9

コミュニティ・レストランが地域に密着しているのも、大人から子どもまで、会話の場であったり、地元の活性化につながっていることは、とても素敵なことだと思いました。私も漠然と、将来は料理に関わる仕事を自らやりたいという思いがあったので、こういう形態もあるのかというように、とても参考になりました。

感想を聞いていて、エコ・コミュニティ・レストランは、こちらから発信するだけでなく、お客様からも何か返ってくるものがあるはずだ、という話について、そういうつながりも生まれるのがエコ・コミュニティ・レストランの良さなのかもしれないと思った。

感想10

- ・誰でも安心して利用できるという点もユニバーサルデザインの一部だと気づかされました。
- ・バリアフリーもコミュニティによって費用をかけなくても改善することは可能だと思いました。
- ・ホームレスの人たちや障害者の人々が社会に出るための場所は日本だと一般に生活している人との間に境があるように思えた。外装やイメージの点が強いと思う。施設というイメージをもっと解放させれば、気軽に入れるように思いました。
- ・コミレスの料理を見ると、彩りが鮮やかでお皿にもどことなく、こだわりをもっていると思いました。その点がお客さんを呼ぶ魅力だったりすると思います。
- ・地産地消という点をこだわると、自然と和食になるものだと思います。日本人が落ち着いたりできる場所は、コンクリートに囲まれた場所ではなく、ぬくもりのある木に囲まれた場所だと思います。
- ・来客される人々も生き生きと生きているが、働き手も生き生きと活動しているように思いました。
- ・コミュニティ（地域において）という考え方もあるけれど、近隣において "あそこへの〜が旬だよ" とかいうのもコミュニティの一部ではないかな (?) と思いました。
- ・安全な食を求めている点もあるけれども、和める場を求めているように思いました。和めるための媒体として食があるようにも思えました。
- ・病院食の話題は、とても納得できました!! 食事は自分自身を形成するものだから美味しいものを食べ、治っていきたくと思います。

者の共食の場、不登校児の自律支援、子育て支援、障害者による運営、生産者と消費者を結びつける試み、温泉や病院とタイアップして温泉療法の病院食に美味しい食を提供する試み、温泉街で働く家庭の子どもに朝食をだすサービス、自然食品店とタイアップしての自然食メニュー、空き店舗や古い家屋、廃校などの空間リサイクルなど全国各地のコミレスの多様な活動を紹介してもらった。

エコ・コミュニティ・レストラン（図2）も、上記に述べた方向性をもっており、循環型社会づくりが市民活動と結びついている点が特徴である。様々な形で、いろいろな人々と結びつきネットワークを組んでいくことで、ムーブメントを起こしていく。エコ・コミュニティ・レストランは、まさに「食を核とした持続可能なコミュニティづくりの協働モデル」と言える。

3. 「企画の教室 ベーシック」

9月7日（水）、8日（木）、9日（金）の3日間、10時から16時まで東京家政大学板橋校舎にて、イベント・講座企画に関する基本的な企画スキルを学ぶ講座（表2）をおこなった。

表2 「企画の教室 ベーシック」プログラム概要

1日目（9/7）	2日目（9/8）	3日目（9/9）
10：00～11：00 ●企画しやすい環境づくり はじめに、名札づくり、チラシ貼り、音環境、自己紹介 11：00～12：00 #私にとって企画とは・・・ ●企画のキホン 定義、シードとニード	10：00～12：00 ●発想力をつけよう！ # 9 Dots 基本的な発想法 ・・・・ブレインストーミング/KJ法 #効果的なチラシの法則	10：00～12：00 ●企画案&プチ企画書づくり 《補足説明》 ・タイムテーブル ・運営 ・資金調達 ・広報（PR戦略）
12：00～14：00 《休憩》 14：00～16：00 ●後ろから考える！ #チラシの分析（1） 要素を取り出してみる #チラシの分析（2） 紙1枚の企画書に書き換えてみる #ブレイン・ライティング（635法） “ネーミングを考える”	12：00～14：00 《休憩》 14：00～16：00 ●リサーチ力を身につけよう！ 情報はどこにあるのか？ どうやって仕入れるのか？ ●グループでコンセプトづくり	12：00～14：00 《休憩》 14：00～16：00 ●プチ企画書提出&ミニ発表会 #SWOT分析 発表：企画内容をグループでプレゼン 評価：発表内容に対する質問、SWOTシートをもとに助言 *助言をもとに話し合い、修正

*参加者8名（学科内訳：栄養5名、環境情報1名、造形表現1名、保育1名）

第1回

あらかじめ持参した30種類以上のチラシを壁一面にはり、その前で最も印象的なチラシを1

枚紹介しながら、自己紹介をおこなった。また、アイデアが浮かびやすい時・場所を語ってもらった。人それぞれ企画しやすい環境があり、そういう環境について考えながら、みんなでこの場を企画しやすい場にしていくことをコメントした。

企画はなぜ必要か、私たちの日常生活を振り返りながら、企画の基本的な考え方について講義した。その後、「後ろから考える」というコンセプトで、1枚のチラシから企画の要素を取り出す作業をおこない、さらにそれをもとにした企画書を作成した。最終的なチラシのイメージを描き、そこから必要事項を考え、企画書を書いていく方法を講義した。また、ある話をきっかけに、ブレインライティング（635法）を使って、キャッチコピーのアイデア出しなどを体験しながら学んだ。

感想11

企画っていうと、もっと難しく堅苦しいイメージみたいなのがあったんですが、皆の意見や広告から意図を汲み取る作業をしたりして、思ったより自分の周りにあるものと気づき、気分が少し楽になりました。また、人が広告を説明するのを聞いた時は、なるほどと思ったりして、その人の話し方も大事なポイントだなと思いました。

また、あまり難しく考えるより、テキストに考えた方が良い時もあり、頭がずいぶん凝り固まっているんだなと思いました。

第2回

9 Dots⁴⁾のアクティビティによって、「固定観念」や「思い込み」について考えた。私たちは、固定観念や思い込みにもとづいて行動していることが多い。しかし、そこから離れ、固定観念を壊すことから創造性は生まれるのではないか。例えば、ガリレオやニュートン、アインシュタインなどの歴史上の科学的発見は、固定観念を壊していく挑戦であった。発想とは、ものの

感想12

- ・今日は協力するワークが中心で色々な人の意見・考え方に触れることができて楽しかった。
- ・9 Dots、頭チリチリでいたが、やり終わった後は爽快であった。固定観念の塊の頭。考え方が人と少しズレているのは理解力が足りないからと実感。
- ・とにかく、毎回、新しいアイデアに触れることができて面白い。

見方の質的転換と言うこともできる。発想法はノウハウであるが、固定観念に気づくことが大切であることをコメントした。

その後、自分たちが集めてきたチラシから特徴を導きだし、ブレインストーミングとKJ法を使いながら、効果的なチラシの法則づくりをおこなった。残りの時間で、2つのグループに分かれ、翌日に発表する企画案を考え、コンセプトづくりをおこなった。

第3回

前半の時間は昨日に引き続き、企画案を考える時間にあてた。後半は企画案が自己満足に陥らないためにSWOT分析について説明し、発表グループ以外のグループは、評価しながら発表を聞き、後で質問や助言をすることにした。

発表では、「京都ぶらっとサイクリング〜ちょっとおしゃれに風を切ろう!」と「週末ケーキ塾」の企画案がパソコンを使ってプレゼンテーションされた。評価のなかで指摘を受けたグループからは、一生懸命考えたはずなのに「指摘されるまで気づかなかった点多かった」との感想があったが、どれも参加してみたいくなる企画内容だった。SWOT分析をおこない、助言してもらったことをもとに、企画書を書き直したところで講座は終了した。

感想13

企画とは、難しいものであると考えていましたが、段階を踏んでいけば、現在の私たちでもできるのだから、決して難しいものではないと思うようになりました。最初に考えた、私にとって企画とは、新しいことを始める土台、という考えは変わらずに、確信へととなりました。実際にプチ企画を立ててみて、わくわくする自分もいて、これが実現されたらどうなるんだろう・・・と思うと、ぞくぞくしてきたのでした。なかなかひらめかない自分には、がっかりして悲しい気分にもなったのですが、いろいろな人の意見や考えを聞くことで、素直に感心しました。これから、グリーンの活動が本格化してくるので、本当に楽しみです。みんなでまた、企画書を書くことも楽しみです。

5. おわりに

以上、本稿ではワークショップ体験を中心に報告した。2005年10月現在、板橋区と協同して、商店街の空き店舗に学生たちがコミュニティ・レストランをオープンさせる企画案があがっている。第2報では、そうしたアウトリーチ体験について報告する。

註

- 1) このプログラムは、カナダの青少年社会参加プログラム「YOUTH SPEAKS」を参考に筆者のワークショップ経験を活かしてアレンジを加えたものである。桜井高志『「若者いきいき・地域わくわくセミナー」報告～カナダにおける青少年の社会参加トレーニング・プログラム "Youth Speaks" を中心に』、『社会教育』国土社、1999年10月号、p55～63)にレポートがある。
- 2) 前述の「YOUTH SPEAKS」を指導した、VIDEA（ビクトリア国際開発教育協会）のプログラム・コーディネーター サンディ・オッケンデンの講演から引用。
- 3) コミュニティ・レストランは、NPO研修・情報センターが推進する事業で、民間非営利活動団体（NPO）の共有財産として非営利の事業につかえる名称としておくために商標登録をしたものである。本稿では、®を省略して記述することをあらかじめお断りしておく。
- 4) 9つの点を一筆書きで何本の線で結ぶことができるかという課題を出し、その気づきや思考プロセスを話し合った。

図1

グリーンな人を探そう

こんな人を見つけよう：

- 1 紙、ボトル、缶をいつもリサイクルしている人 _____
- 2 最近とてうれしいことがあった人（何があったのか話してもらおう） _____
- 3 動物試験をしていない石鹸や化粧品を選んでいる人 _____
- 4 最近、休日を自然環境のなかで過ごした人（どんな経験だったかを話してもらおう） _____
- 5 最近、地域の環境保護活動に参加した人 _____
- 6 暖房を上げるかわりに衣服を重ね着するようにしている人 _____
- 7 未来を楽観的に考えている人（その楽観主義についてその人と話してみよう） _____
- 8 定期的に（体の）運動をしている人 _____
- 9 最近、環境に関して何か新しいことを学んだ人（何を学んだのか話してもらおう） _____
- 10 できるだけ車を使わず、徒歩や自転車などで用を済ませよう努力している人 _____
- 11 素晴らしい自然環境を持つ場所に、特別な思い出を持っている人（その場所について話してもらおう） _____
- 12 最近、うまくいった環境保護活動の話聞いた人（その話を簡単に話してもらおう） _____
- 13 最近、腹が立つようなことがあった人（何があったのか話してもらおう） _____
- 14 未来について不安を感じている人（その不安について話してみよう） _____
- 15 壊れた家具や、道具、電機製品などはできるだけ修理して長く使うようにしている人 _____
- 16 特定の建物や建築物をたいへん気に入っている人（その場所について話してもらおう） _____
- 17 最近、環境に関して不安な話を聞いた人（どんな話だったか教えてもらおう） _____
- 18 DIY ショップなどで売ってる熱帯材や、それらを使った家具を買わないようにしている人 _____
- 19 健康的な食事を心がけている人（どんな内容が話してもらおう） _____
- 20 ガス・水道・電気などの消費量をいつも気にかけて、記録している人 _____

図1. 「グリーンな人を探そう」

S・グレイグ、G・バイク、D・セルビー「環境教育入門 EARTH RIGHTS」明石書店、1998より引用

図2

テーマ3「地域循環の拠点としてのコミレス=エコ・コミレス」

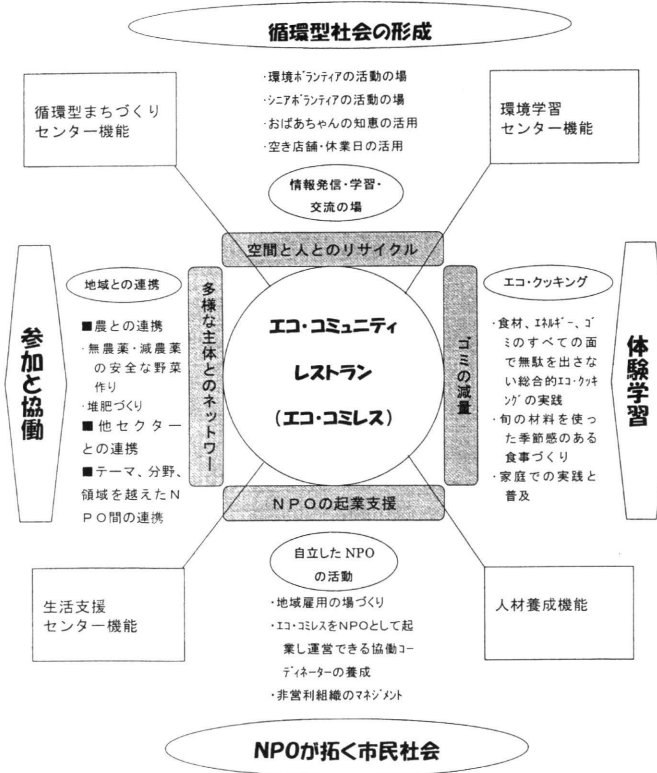


図2. 「コミュニティ・レストラン」テーマ別展開事例チャート

TRCブックレット9『NPOで地域を変える「コミュニティ・レストラン」をつくる 一国内外に広がる「コミュニティ・レストラン」初体験』より引用